

## アディソンとロック

—想像力説を中心に—\*

野村 武

## 〔I〕

ジョン・ロック(1632—1704)は、ジョウゼフ・アディソン(1672—1719)等の十八世紀英国文学者達に対して、アリストートルがスコラ哲学者に対するが如き位置を占め<sup>(1)</sup>、彼の『人間悟性論』(1690)は聖書を除けば、十八世紀英文学に最大の影響を与えたものと言われているが<sup>(2)</sup>、ロックは詩に対して無関心と言うより冷淡な態度を取った哲学者であった。彼は『教育論』(1693)の中で、子供に詩的気質がみられる時は、親はこれを抑えるべく極力努力すべきであり、詩と賭博は、他に生きるすべなき人々以外には、何の益ももたらさないもので、詩神の集うパルナッサスの空は心地よいが、その地は不毛であると詩を攻撃している<sup>(3)</sup>。『悟性論』に於ても、想像力に言及することは極めて稀で、たとえこの語が用いられても、軽蔑的な意味で用いられ、想像力そのものに対しては、重要さが与えられていなかった。合理主義的な啓蒙の時代精神と相まって、ロックの経験哲学は、十八世紀の文学風土に大きな影響を与え、所謂「哲学のひややかな感觸」は、詩を衰退させるのにあずかって力があつたと言われている。

彼の生きた時代をよく現わしていると言われるアディソンも、ロックに敬意を払い、しばしば、彼に言及し、自分の所説を確証づけるため『人間悟性論』を引用している。しかし彼はロックとは異り、想像力を謳歌し、詩を尊び、ミルトンやシェイクスピアの天才を讃えた批評家であった。想像力論の最終号

『スペクテイター誌』421号に於て、「良識にあやをそえ、文の楽しさの差を生むのは、想像力を動かすこの力である。それは著述一般を引き立たせるが、この力こそまさに詩の生命であり極致である……この中には、何か創造の如きものがある。」と述べて詩に於ける想像力の重要性を強調した。この小論の目的は、アディソンの想像力説を、『悟性論』によつて代表されるロックの経験主義的認識論にみられる想像力説と比較し、両者の間の相違と類似を、ディスクリプティブに検討することである。ロックに入る前に、十七世紀後半からロックに到るまでの想像力説の流れを簡単にたどってみたい。

ホップズは *Answer to Davenant* (1650) に於て「時と教育は経験を、経験は記憶力を生む。記憶力は判断力と想像力を生み、判断力は詩の力強さと構成を、想像力は詩の装飾を生む。」と述べ<sup>(4)</sup>、翌年『レヴァリアサン』では、観念や事物の類似を見出す働きをウイット、又は想像力 (fancy)、これらの相違を識別する働きを判断力 (judgement) と名づけた。判断力は美德としてすすめられるが、これを伴わない想像力是一种の狂気であると彼は考え、良き詩にあっては、両者が必要であるが、想像力はその奇想天外さ故に楽しませるものであるから、想像力が顕著であらねばならぬ。しかし無分別さのため不快にさせてはならないと述べている<sup>(5)</sup>。斯様な判断力と想像力説の概念は、以後、啓蒙期の文学批評の底流となり、例えば、トマス・シャドウエルは *Preface to the Humorists* (1671) の中で、精神の最も高貴な能力である判断力は、常に想像力をその配下に置くべきであり、判断力は荒けずりな想像力の仕上げをするものだと言ひ<sup>(6)</sup>、又、マルグレーヴ卿は『詩論』(1682) の中で、判断力なき想像力は狂気に過ぎず、想像力はペンの飾り羽であり、理性は知力を増す本質的で有益な役目を果し、想像力は心情を打つに過ぎないと述べている<sup>(7)</sup>。更に、詩作に於ける想像力の働きを、invention, fancy, elocution に三分し<sup>(8)</sup>、当時としては異例と思われる程の進んだ考察をしたドライデンですら、「想像力は奔放、放縦であるから、スパニエル犬の如くに、判断力を跳び越えぬようおもりにくくられるべきであり」<sup>(9)</sup>、想像力と理性は手をたずさえて進むけれ

ども、冒険好きの想像力を抑制するのは理性であると考えた<sup>(10)</sup>。

上述の如く、想像力はしばしば、ウィットと同義に用いられ、判断力と対比されその無秩序と奔放さ故に、判断力に従属されるべきものと考えられて来た。ロックのウィット論と判断力論は、この概念を集大成したものであり、ここに、彼の想像力説と詩観への糸口を見出すことができよう。

## 〔Ⅱ〕

ロックによれば、単純観念を外界から受け入れるにあたっては受動的に過ぎない悟性は、貯えられた観念を自由に比較、結合、反復し、実在の世界とは無関係に、複雑観念や混合様態を作り出す能動的な機能を有している。又、悟性は視界から消え去って眠れる観念を積極的に呼びさます能力を持ち、これをロックは、「第二の知覚」とも「記憶力」とも呼んで、重要な精神機能であると考えた。そして彼は、想像力とか、発明の才、才能の明敏さとかは、貯えられた観念を機に臨んで呼び起すべく手元に準備しておくことであると言い、この心の働きに関連させながら、彼は、ウィットと判断力の相違を論じた<sup>(11)</sup>。即ち、如何に小さなものであれ、観念の間に存在する相違を識別するのが正確な判断力と明晰な理性であり、ウィットとは、観念の類似と、類似した観念を素早く結びつけ、想像の中に楽しい絵と幻想を描き出すことにあると考えた。かくて比喩は、知識の基礎である判断力とは反対の精神機能であるウィットの所産として、「真理と理性の峻厳な法則」に照らされればはかなく消え去り、「真理と理性」に一致しない娯楽であり、慰み事であるとして、真面目な思考の対象とは考えられず、重きを置かれなかった。それでは、ロックが「最大の敬意」を払うと言った「真理」とは何か。彼は何を真実と考え実在と見做したか。彼の詩観の背後に横たわるものを知るため、彼の認識論を更に考察せねばなるまい。

ロックは、知覚 (perception) を悟性と同義に解釈してこれを三種に分類した<sup>(12)</sup>。第一の知覚は、外界の印象を単に受動的に受け入れることなく、

これを心の中で能動的に把握することを意味すると思われる「心の中の観念の知覚」, 第二は, 「記号の意味の知覚」, 第三は, 「我々の持つ観念の間の一致不一致の知覚」である。かくしてロックは, 想像力の機能に帰すべき精神機能である第一の種類知覚を悟性の機能に帰してしまったと言えよう。ロック自身が第一の種類知覚を悟性と呼ぶことにためらいを感じていたことは, 「我々が通常, understand すると言い得るのは, 第二, 第三の種類知覚に於ける場合のみであるが」とロック自ら付言していることから察せられよう。けだし彼は, 想像力と悟性との相違に気付きながらも, これを黙殺してしまったのであろう。

知覚を上述の如く三分したロックは第三の知覚だけが知識であるとした。知識とは「二つの観念の一致不一致の知覚」であり, これなくしては, 人は想像し, 推測し, 信じようとも, 知識からは程遠いものであり, 「判別なくしては知識はあり得ない」と彼は考えた<sup>(43)</sup>。「人は単にその想像する事物を語っていると思われるのを嫌い, ありのままの事物を語ることを望み」, 重要なのは「夢や空想」ではなく, 「事物の实在の姿」であるとすれば, ロックが比喩を戯れとして軽んじ, 想像力を, ひいては, 詩そのものを排斥したことも肯かれよう。

しかし, 知識とは観念の識別であり, しかもその観念は心の中のみ存在するとするならば, 「狂信家の幻想も, 正気の人間の推論」も観念の識別さえあれば, 等しく知識となり得るのではないかと言う反論が生ずる。ロックは自ら投げかけたこの反論に対して, 知識の实在性を論じて次の様に答えた。即ち, 観念についての知識は, 単なる想像力の所産より少し (a little) 程度の進んだもので, 観念と实在の事物との間に一致がみられれば, その観念は实在的であると言えるが故に, あらゆる単純観念 (simple idea) と, 実体 (substance) を除くあらゆる複雑観念 (complex idea) は, 实在的観念 (real idea) であるとロックは答える<sup>(44)</sup>。かくしてロックの意味した实在的観念とは, (一) 实在する現象の世界に一致する観念と, (二) 数学や倫理の世界の如く, 外界から

隔絶され、‘nominal essence’ と ‘real essence’ が一致し、心の中にその原型 (archetype) を有する抽象的、数学的 (mathematical) な観念であった。抽象的観念こそ普遍的であると考えられ、又、実在的観念とは自然 (nature) に基礎を置くものであるから、ケンタウルの如きは、自然に基かない空想的 (fantastical) 妄想的 (chimerical) 観念であると考えられた<sup>(15)</sup>。

斯様にロックが抽象的数学的観念を重視し、極めて合理主義的思弁形式をとったことは又、彼の神と無限に関する概念にもあらわれている。ロックは敬虔なキリスト教徒であり、単なる理神論者でないと言われている。又、彼は、神の永遠性、神性は、その創造物によって理解され得ると言うことは確実、明晰な真理であり、神の存在の証は、自然の造化によってなされるとも述べ、当時流行した ‘physico-theology’ の思想も持っていたと思われる。しかし彼が、『悟性論』に於てなした神の存在の証明は合理主義的なものであったと言える。彼が、その真理は数学的真理に等しく、理性がこれを発見すると言っている神の存在の証明は、論証 (demonstration) によってなされており、心の中の「真の光」である理性こそ、「あらゆる事柄に於ける我々の最後の審判者であり指導者であらねばならぬ」とロックは主張した<sup>(16)</sup>。この論証によって得られた神の存在の観念に、人が自らの内に見出す知、力、幸福等の属性を、無限の観念によって拡大し、これを神の存在の観念に結びつけることによってロックは神の観念を構成した<sup>(17)</sup>。そしてこの無限の観念とは、心の中の有限な、分割された時とか空間の観念を際限なく反復拡大することによって生れ、かくして、永遠と空間の無限性 (無限の空間ではなくて) についての観念が得られるとロックは考えたのであった<sup>(18)</sup>。

既述した如く、ロックは実体に関する観念を実在的観念から除外し、彼自らがあらゆる観念の基礎であると見做した実体についての確実な、明晰判明な観念 (clear and distinct idea) は不明であるとした。このことは彼をして、「自然の研究」とか ‘natural philosophy’ は科学にはなり得ないと思わせ、物体に関する科学はないと考えさせた。かくして彼は、我々の無知は知識より無限

に大きいものと考え、不可知論的立場を取るに到る。斯様なロックの懐疑思想の背景には、彼が反省と共にあらゆる観念の基礎とした感覚に対する不信の念があったのではあるまいか。これは次の諸点から推察されるであろう。第一に、ロックは悟性の対象としての観念を、感覚資料（心象）、概念、物体とに三分したが第一の観念、即ち感覚資料を彼が幻影（phantasm）と命名したこと<sup>(19)</sup>。第二には、彼が知識をその明澄と確実性の程度によって三分した時、直覚的知識を最上位に、次に論証的知識を、最下位に感覚的知識を置き<sup>(20)</sup>、感覚的知識の及ぶ範囲は、これら兩者よりもはるかに狭いものであると考えたこと<sup>(21)</sup>。第三には、ロックが物体の第一性質と第二性質の相違を強調したことである。彼によれば、通常、物体に内在していると思われている色とか香の如き第二性質は、物体固有に内在しているものではなく、運動とか形状、数の如き第一性質から生ずるもので、例えば色は、強力な拡大鏡の観察の下に、消え去ってしまう性質と考えられる<sup>(22)</sup>。ウィレイは、斯様な物体の分析は、ガリレオから流れを引く真実と虚偽とを判別しようとする十七世紀の哲学的風潮であり、‘primary’は‘true’に、‘secondary’は‘false or fictitious’と同義に考えられていたと言う<sup>(23)</sup>。ロックが繰り返し兩者の相違を強調したのは、この様な風潮の現われであったと思われる。

以上で我々は、ロックが想像力の分野に入れられるべき精神機能を悟性の働きに帰し、観念の一致不一致の識別を知識とし、判断力に対比するものとしてウイトを考え、その所産である比喩を軽んじ、ケンタウルの如き実在しない想像力の所産を実在的観念でないとして排斥したことを眺めて来た。又、彼は、感覚に不信を抱き、抽象的数学的観念こそ普遍的であるとして重んじ、神の存在も、理性によってあかされる数学的真理に等しいとして、合理主義的にこれを証明したことをみて来た。次に我々はアディソンが想像力を如何に考え、ロックとの間に如何なる相違と類似があるかを検討したい。

### 〔Ⅲ〕

ロックの場合と同じく先ず彼のウイト論を眺めよう。アディソンは既に

1694年、オーヴィドの『転身譜』訳につけた「註」に於て、ウィットを論じ、ロックのウィット論の一部を引用して、これはウィットに関する「最良の説明」であると評している<sup>(24)</sup>。彼はここでなしたウィット論をそのまま、1711年、『スペクテイター誌』62号につたえ、再び、ロックのウィット論と判断力論を長々と引用して、これはウィットの「最良かつ最も哲学的説明」であると讃えた。しかしながら、アディソンはロックの説をそのまま踏襲したのではなく、両者の間に次の如き相違が認められる。先ずアディソンは、観念の類似に加うるに、喜びと驚きをウィットに不可欠な要素と考えた。次に重要な相違は、ホップズやロックにあつては、「健全な判断力」と対比された「狂気の想像力」やウィットの所産である比喩は、理性と真理を惑わせ、真実と虚偽を混乱させるものとして非難されたのとは対照的に、アディソンは比喩の働きを高く評価し、ミルトンやホーマー、聖書にみられる大胆な比喩を豊かな想像力の所産として称讃したことである<sup>(25)</sup>。

次にアディソンの『想像力の喜び』(『スペクテイター誌』411号～421号,1712)を中心に彼の想像力説に目を転じたい。ロックとの関係に重点を置きながら、彼の想像力説を要約すれば、おおよそ次の如くである。五感の中で最も優れているのは視覚であり、想像力の喜びはすべて視覚に訴える対象のみから生ずる。これを二分し、眼前に存在する事物から生ずるものを想像力の第一の喜びと呼び、眼前には実在しないが、詩とか彫刻に接して、眠っている心象が呼びおこされて生ずるものを第二の喜びと言う。想像力の喜びは感覚の喜び程下品ではないが、悟性の喜び程上品でもない。しかし想像力の喜びは、悟性の喜びと同じ程大きく、人の心を奪うものであり、その利点は、悟性の喜びほど、頭脳の働きを必要としないことである。更に、想像力の喜びは健康を増進するのに役立つから人は大いにこの喜びを味わうべきである。第一、第二ともこの喜びは広大なもの、美しいもの、珍らしいものから生ずる。その必然因は不明であるが、目的因はそれぞれ、広大無限な自然に接して、人間が神をめぐるため、種族保存と、自然界を美しくするため、新しい知識を追求するためである。第

一の喜びに関しては、広大な山や海の如きは人工の作品より大きな喜びを与えるが、自然界の事物と人工の作品とは、両者相似ることによって、想像力の喜びは増大する。第二の喜びは、描写された対象をその原型と比較する心の働きから生じ、美とか新しさの他に、恐ろしいもの、醜いものさえも、描写が適切であれば、想像力を動かすから、第二の喜びは普遍的であると言える。又、哲学者や貧しい想像力の人が非難する‘fairy way of writing’は大きな喜びを与える。想像力の喜びを生むのは詩人に限らず、歴史家や道徳家等も自然界から取材する比喩の力によって想像力の喜びを生み、就中、自然科学は大きな喜びを与えてくれる。まことにこの想像力を動かす力こそ詩の真髄である。以上がアディソンの想像力の大ききな紹介であるが、より詳しく検討しながら、ロックとの相違を明らかにしたい。

ロックはあらゆる内在観念を否定して、観念は感覚と反省より生じ、感覚の中でも特に視覚を最も包括的な感覚であると考えたが、視覚を重視するのは、ニュートンの『光学』が影響を与えていると言われる十八世紀の一般的な風潮であった。アディソンも同様に視覚を重視し、彼の想像力論は「我々の視覚は、あらゆる感覚の中で最も完全かつ喜ばしい感覚である」と言う書き出しで始まり、彼は、視覚を通ずる以外には如何なる心象も持ち得ないと考えた。しかし斯様に経験論的立場を同じくしながらも、ロックと異り、アディソンは想像力を感覚と悟性の中間、いやむしろ感覚に近い位置に置き、ロックが感覚に不信を抱き、抽象的観念を重んじたのとは逆に、心象を、特に自然界から得られる心象を重んじ、自然美に対する豊かな審美眼を有していたと言える。又、ロックがケンタウルの如き観念を空想の所産として重きを置かなかつたのとは対照的に、アディソンには、想像力の所産であり現実の世界から遊離した詩的眞の世界とでも言うべきものを認め、喜んでこの世界に遊ぼうとする態度がみられ、これは次の諸点から明らかであろう。

アディソンは、美しいものから何故に想像力の喜びが生ずるかを論じた時、ロックの物体の分析の説明に言及し、これを近代科学の素晴らしい発見である

と讃え、目的因をロックのこの説明に求めた。色は物体固有に内在するものではなく、人の心の中の観念に過ぎず、実際には無色で無味乾燥の世界を喜ばしくするため神が授けたもうたものであると説明した。ロックの説は、アディソンにとって想像力の喜びの目的因を説明するのにまことに好都合であったと言える。しかしロックの分析の意図が、真実と虚偽との判別であり、その重点は、第二性質より第一性質に置かれていたのとは異り、アディソンにとって大切なのは第二性質であり、色あればこそ、人は幻想的な美（visionary beauty）を味い、ロマンスの魅せられた英雄の如く、美しい城を森を牧場を散策し、ロックが嫌った楽しい幻想（delusion, vision）の世界に遊ぶことができると考えたのであった。この態度は又、彼の‘fairy way of writing’の解釈と弁護にも通ずるものがある。アディソンは、「ひややかな想像力と哲学的気質」の人からは、蓋然性がないと言う理由で非難された‘fairy way of writing’を是認し、シェイクスピアの魔女や妖精の描写を、この詩人の独創性と豊かな想像力の所産として大いに称讃した。そして彼の弁護は、ドライデン的解釈<sup>(26)</sup>、即ち伝説と民間信仰に守られていると言う解釈を含みながらも、幻想と楽しい詐欺（agreeable imposture）の世界によるこんでひたろうとする新しい見方を含んだものであった。彼は又、シェイクスピアの天才の偉大さを、他の如何なる登場人物にもまして、この詩人の全くの想像力の所産であるキャリバンに認め<sup>(27)</sup>、想像力を喜ばせるため自然の姿を自在に変革する自由を詩人に与えているが、これらの点に、創造的想像力の萌芽が認められるのではないかと思われる。

次にアディソンにみられる自然と神と想像力との関係を眺めよう。ロックが神の存在と属性を極めて合理主義的に考察したことはすでに述べたが、アディソンも、『スペクテイター誌』531、590号にみられるように、ロックの思弁形式をそのまま踏襲したと思われる様な論をすすめている。しかし、彼の宗教観は理性に基くよりも、想像力を媒介とする自然界に顕わされた神との密接な融合に基いていたと言えよう。『スペクテイター誌』465号に於て彼は、神の存在の最大の証は、自然界にあり、目に触れるあらゆる自然の事物に接して人の

心に信仰の念が湧き、都会や宮廷は人間の作であり、田舎こそ神の造化であると言っている。同誌580号に於ては、自然界にみられる神の遍在についての考察は、「哲学のひややかさ」でなされるべきではなく、「我々自身の存在の意識」と一体化されてなされるべきであると述べ、更に同誌489号では、荒れ狂う大海原を前にして、人の心はこれを作りたもうた神におのずから向い、この大洋の姿は、形而上学的論証によると等しく、神の存在を立証する。想像力は悟性を促し、感覚され得る事物の広大さによって無限な存在についての観念が生ずるとも述べている。斯様にアディソンは神の存在の証を自然界にみいだしたのであるが、彼の関心は就中、無限に拡がる宇宙に向けられていた。彼は自ら、極小の世界よりも極大の世界を考えることにより大きな喜びを感じずと述べ<sup>(28)</sup>、『ガーディアン誌』103号に於ては、1680年の大彗星に言及して、彗星の飛行する大宇宙の神秘を、感嘆と畏怖の念で讃え、宇宙は、神の全知全能の概念を得るために想像力が観照するのにふさわしい対象であると述べている。冗長をいとわず更に一例を引くとすれば、『スペクテイター誌』565号であろう。「昨日私は、広々とした野原で夕方の散歩をしていた。いつしか夜のとばりがおり、西の空に現われた変化に富んだ彩りを楽しんでいた。彩りがうすれ消え行くにつれて、次から次へと星が現われ、全天が光り輝いた……白く美しく銀河が姿をみせ、ついに壮麗な雲模様を浮べた満月が昇って、この光景に欠けるものはなくなった。」彼の心は星から星へ、空間から空間へと、廣大無限な宇宙をさまよい、神の無限にくらべ、人間のむなしさを嘆かざるを得ない。しかし沈んだ彼の心は、神の遍在と全知を思うことによって慰められ、神の宿る無限の空間は、ニュートンの如くに‘the sensorium of God’と呼ぶのが最も崇高な呼び方であると考えた。要するにアディソンは、自然界の神の姿を理性によってとらえたのではなく、想像力によって観照したのであり、想像力こそ、人間と神とを結びつける媒介であったと言える<sup>(29)</sup>。アディソンの想像力論が、想像力を自由自在に動かす力を有する神の讚美に終わっていることも示唆的である。

## 〔IV〕

我々はこれまで主としてアディソンとロックの相違に着目して来た。しかしアディソンは、ロックの経験論的立場を全く離れ、ロックとは異質の、彼独自の想像力説を展開したかと言え、そうではなく、ロック的なものをも含んでおり、又、彼の想像力は、しばしば、悟性と混同されていた場合があった。彼の意味した想像力とは多くの場合、記憶の中の心象を保留、拡大、合成、変化させる‘picture-making faculty’であり、記憶力と大差なき働きであった。彼には、詩の与える感動に打たれ、想像力の喜びを味わいながらも、その心理学的説明に窮したと思われる所があり、想像力の第二の喜びの原因の説明に於て、この喜びは、描写された対象とその原型とを比較する心の働きから生じ、その目的因は、観念の一致不一致に基く真理の追求にあるとした如きは、極めてロック的であると言える。又、極大極小の世界の追求にあたって、悟性は無限にこれを追求し得るが、想像力は、ほどなくその限界につきあたると言い、これを想像力の欠点であると彼が考えたのは、想像力の及ぶ範囲を視覚の及ぶ範囲内に限定したためであり、想像力に入れるべき精神機能を悟性の分野に入れてしまったと言えよう。更に彼が、詩を鑑賞するためには、外界の心象を保留するための豊かな想像力と、表現の適切さを識別するための明敏な判断力が必要であると考えたことや、こやし山の描写にすら喜びを感じずるのは、心象に対してではなく、表現の適切さに対して喜びを感じずるが故に、これは想像力の喜びと言うより悟性の喜びであると考えたこと等に、コンヴェンショナルな判断力と想像力との対立概念の影響をよみとることができる<sup>(30)</sup>。かくしてアディソンの想像力説は、ロック的なものと、反ロック的なものとを同時に含みながら、ローマン主義批評への道を開いていったものと言えよう。

ふり返ってみるに、この小論は、アディソンを強調したため、ロックの認識論が、英国文学批評に寄与した面を軽視しているきらいがある。丁度、「存在

の鎖」の思想が、啓蒙の精神特性とよく合致しながらもそれ自身に、全く反対の方向へ向う思想を内包し、ローマン主義理論へと展開して行ったと同様に、ロックの認識論が、啓蒙期以後の文学批評が展開するのに大きな貢献をなしたことは、タヴァソン等の優れた研究書の明らかにしていることである。アディソンの想像力説も、より多方面からロックとの関連に於て考察されるべきであり、よって今後の研究の課題としたい。

## 〔註〕

- \* 日本英文学会中部支部十八回大会の発表草稿に加筆したもの。
- (1) Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (London: Chatto and Windus, 1953) p. 265.
  - (2) Kenneth MacLean, *John Locke and English Literature of the Eighteenth Century* (New York: Russell and Russell, 1962) p. v.
  - (3) Cit. D. G. James, *The Life of Reason* (London: Longmans, 1949), p. 85.
  - (4) J.E. Spingarn, ed., *Critical Essays of the Seventeenth Century* (Bloomington: Indiana Univ. Press, 1957), Vol. II, p. 59.
  - (5) *Leviathan*, Part I, Chap. 8.
  - (6) J. E. Spingarn, *op. cit.*, Vol. II, p. 59.
  - (7) *Ibid.*, Vol. II, p. 287. See also Robert Howard, *Preface to the Great Favorite* (1668) *ibid.*, Vol. II, pp. 110f.; John Dennis, *Large Account of Taste* (1702), ed. E. N. Hooker, *The Critical Works of John Dennis*, 2 vols. (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1939 and 1943), Vol. I, pp. 282, 287.
  - (8) *Preface to Annus Mirabilis* (1666), *Essays of John Dryden*, ed. W. P. Ker, 2 vols. (New York: Russell and Russell, 1961), Vol. I, pp. 14f.
  - (9) *Epistle Dedicatory of Rival Ladies* (1664), *ibid.*, Vol. I, p. 8.
  - (10) *Of Dramatic Poesy, an Essay* (1668), *ibid.*, Vol. I, p. 128. しかしドライデンは想像力をかなり重視した。 Cf. *The Author's Apology for his Poetical Works* (1677), *ibid.*, Vol. I, p. 186.
  - (11) *An Essay concerning Human Understanding*, ed. A. S. Pringle-Pattison (Oxford: Clarendon Press, 1956), II, xi, 2.
  - (12) *Ibid.*, II, xxi, 5. この場合の知覚 (perception) は把握、認識の意味に用いられている。
  - (13) *Ibid.*, II, xi, 1; IV, i, 2.

- (14) *Ibid.*, IV, iv, 1-6.
- (15) *Ibid.*, II, xxx, 1, 5.
- (16) *Ibid.*, IV, xix, 14.
- (17) *Ibid.*, II, xxiii, 33; xvii, 1.
- (18) *Ibid.*, II, xvii, 1-8.
- (19) *Ibid.*, I, i, 8.
- (20) *Ibid.*, IV, ii.
- (21) *Ibid.*, IV, iii, 5.
- (22) *Ibid.*, II, viii; xxiii, 11, 12.
- (23) Basil Willey, *op. cit.*, pp. 77 f.
- (24) *Works of Addison*, 6 vols (London: 1854-1856, Bohn's British Classics) Vol. I, p. 150.
- (25) *Spectator*, Nos. 160, 285, 421.
- (26) *An Essay of Heroic Plays* (1672), *op. cit.*, ed. W. P. Ker, Vol. I, p. 153; *The Author's Apology for Heroic Poetry* (1677), *ibid.*, Vol. I, p. 187.
- (27) *Spectator*, No. 279.
- (28) *Tatler*, No. 119.
- (29) Cf. Ernest Lee Tuveson, *The Imagination as a Means of Grace* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1960), p. 97.
- (30) しかしアディソンは『スペクテイター誌』600号に於て、精神を想像力とか理性とかに分割することは不可能であり、記憶し、想像し、理解するのは、全体として一つの精神であるとも述べている。